

〔研究ノート〕

フィールドワーク前後における大学生の地域愛着感情の変化 —大学生のフィールドワークの事例から—

Changes in Feelings of Regional Attachment Before and After Fieldwork :
Through the Case Studies of Fieldwork by University Students

古 谷 昌 重
FUYUTANI Masashige

より良い地域づくりのために若い力に寄せる期待は大きい。地域づくりを実践するためには、まず地域のことを知り、愛着を持って関与することが第一歩となる。地域愛着を育むためには「場所の経験」を積ませるための地域教育が重要となる。本稿では初等中等教育の延長線上にある大学における地域教育のあり方を考察するため、入学以前の地域教育の現状を整理した上で、大学生によるフィールドワークの事例から実施前後における地域愛着感情の変化についての考察をおこなった。大学生は小中高生と比べ地域外から通学してくる外部者であるケースが多いが、フィールドワークは外部者にとっても地域愛着を醸成させるための有効な「場所の経験」となることが示唆された。研究方法と精緻な分析は今後の課題として残されているが、今後の大学教育における地域教育のあり方を考えていくための展望を示した。

キーワード：地域教育、地域愛着、フィールドワーク、PBL

I はじめに

持続可能で住みよい地域にするために、当該地域に通学する大学生の力に期待するところは大きい。そして、各地で様々な地域連携の取組みがなされている。しかし、学生の関心は多様で、地域づくりについて関心を示す学生がいる一方、地域に関しては全く無関心の学生が存在することも事実である。学生らしい若い感性を地域に吹き込むことは、地域にとってはおおいに期待するところであり、また学生自身にとっては意義深い経験となることは論を待たない。したがって、少しでも多くの大学生たちに地域に関心を持ってもらい、地域に貢献できる存在になってもらいたいという願いを実現させるためにはどうすればいいのかが問われる。そのためには、大学生たち自身がこの地域は自分たちの地域でありこの地域を自分たちの力で活気づけたい、素晴らしい地域にしたいという自発的な発揚をもって力を発揮することが求められよう。彼らにいかに当事者意識を持たせ、地域活動に積極的に関与させることができるか、そのための地域教育についてのあり方を模索し、今後の教育方法の改善のための示唆を得ることが本稿の目的である。

本稿ではまず、第Ⅱ章で大学入学前における地域教育の現状と課題を整理し、それを受け継ぐ大学での教育のあり方を模索する。第Ⅲ章では、筆者が取り組んだ地域教育の一環としての

フィールドワークの事例を取り上げ紹介する。そこで得られた示唆から、第Ⅳ章で今後の大学における地域教育のあり方についての展望を加え総括する。

Ⅱ 初等中等教育における地域教育の現状と課題

大学における地域教育が重要性を帯びていることは、地域志向教育が重要な政策課題として進められていることからわかる。¹⁾ 大学が立地する地域で活躍できる人材を育成するためにも、地域を活性化させるためにも、地域における大学の果たす役割は極めて大きい。

大学での地域教育を彼らが入学前までに受けてきた教育をより高度に高めるものと位置づけた場合、入学までにどのような地域教育がなされてきたのかを捉えておく必要がある。そこでまずは、初等中等教育における地域教育の実態を池俊介ら（2022）の文献から整理し、その上で、これまでの地域教育を引き継ぎ発展させる形での大学教育のありかたを検討していく。

1 フィールドワークの教育的意義

地域教育は地理教育の現場ではフィールドワークの形で行われることが一般的である。フィールドワークについては人文社会科学や自然科学の別を問わず、各学術領域において多様な定義がなされており、一概に把握することは難しいとされる。一方で、「野（＝フィールド）における研究」という共通したニュアンスは存在している（平凡社「大学事典」）。フィールドワークとは、研究室や実験室などにおける屋内での研究と対比される活動で、野外における学問的な営為を包括的に表した活動、すなわち「観察・観測・聞き取り調査などにより必要な情報を収集する野外での調査活動のこと」と捉えるのが一般的とされている。

初等中等教育におけるフィールドワークの教育的意義はどこにあるのか、池（2022）は次の4つを指摘している。①生徒の興味・関心の喚起、②知識やスキルの習得、③学習方法の習得、④他者と交流する機会の提供。日本は④がヨーロッパ諸国と比べ弱いとされる。²⁾

2 初等中等教育におけるフィールドワークの実態

大学入学前の地域教育における実態については池俊介ら（2022）によって報告されており、その概要は以下のとおりである。³⁾

（1）小学校における地域教育の実態

小学校では、身近な地域における「まちたんけん」や「社会見学」など多様なフィールドワークが実施されており、3学年社会科の学習指導要領（2017告示）では、「身近な地域や市区町村の地理的環境、地域の安全を守るための諸活動や地域の産業と消費生活の様子、地域の様子の移り変わりについて、人々の生活との関連を踏まえて理解するとともに、調査活動、地図帳や各種の具体的資料を通して、必要な情報を調べまとめる技能を身に着けるようにする」ことが目標のひとつとされ、学区程度の身近な地域を対象とした活動の実施が求められてきた。

しかしフィールドワークの技能不足に不安を抱えている教師も多く、野外で授業は行うものの、方位・地図記号等の形式的スキルの指導や目的の不明瞭な野外活動に終始し、「地域の様子」を理解するための本来のフィールドワークの形骸化が危惧されていると指摘している（篠原2000、池ら2022）。また、3学年の“身近な地域”の年間配当数が11から4に大幅に削減され、フィールドワークの実施率の低下が懸念されるとの指摘もある。⁴⁾

(2) 中学校におけるフィールドワークの実態

中学校においても、フィールドワークの実施が重視されている。2017年の学習指導要領でも生徒の居住地域を対象とした観察や野外調査、文献調査などの実施方法を学ぶ「地域調査の手法」と、地域の将来像を構想する「地域の在り方」の単元でフィールドワークの実施が求められ、地域課題解決のための重要な方法としてフィールドワークが位置づけられている。しかし、中学校におけるフィールドワークの実施率は決して高くない実態が宮本（2009）、中山（2019）によって指摘されている。⁵⁾⁶⁾

また、高校入試では「身近な地域の調査」に関する出題が現実的に難しく、地形図の基本的な読図能力を問う問題が出題される程度であり、教室での読図指導さえ行っていれば入試対策に支障がないと考える教員が多く、それがフィールドワークの実施率の低迷に拍車をかけていると池（2022）が指摘している。⁷⁾

(3) 高校におけるフィールドワークの実態

高校においても学習指導要領においてはフィールドワークが一貫して重視されてきた。2022年度から必修科目となった「地理総合」においてはフィールドワーク（地域調査）の実施が必須とされた。具体的には、「持続可能な地域づくりと私たち」の単元の中に「生活圏の調査と地域の展望」の項目が示され、地域調査を実施し、生徒が適切にその方法を身につけるよう工夫することが求められている。

高校では、小学校、中学校における地域学習を発展させて本格的なフィールドワークが行われていると思われがちだが、実態はそうでもないことが池（2022）によって指摘されている。池らが2012年に神奈川県内の高校の地理担当教員（124名）を対象に行った調査では、フィールドワークを一度も実施したことのない教員は53%にのぼり、このうち約3分の1の教員は「読図指導も行ったことがない」と回答している。

(4) フィールドワーク不振の原因

このように、大学入学前、すなわち小・中・高校におけるフィールドワークの実態を見ると、多くの課題が浮かび上がる。そこで、池ら（2022）の報告をもとにフィールドワークの実施を阻害している要因を整理し下記にまとめた。

表1 フィールドワーク実施の阻害要因 （出所：池[2022]pp.11-12をもとに作成）

1. フィールドワークのための準備時間の確保の難しさ
・ 過密な教育課程や入試準備などによる授業時間の不足。
・ 部活動の指導等の公務多忙化によるフィールドワーク準備の時間確保の難しさ。
・ 入試に役立つとは認識されていないフィールドワークの時間が実質的に減っている。
特に中学校・高校ではフィールドワークの実施を教員に躊躇させる大きな原因となっている。
2. 校外に生徒を引率するための手続の問題
・ 公立高校の管理職は校外に生徒を引率することに対して消極的な場合が多い。
フィールドワークの出張許可が非常に得にくい。
特に土日や夏休みを利用した遠隔地への引率については管理職の理解を得にくい。
・ 出張手続きをめぐる面倒なやり取りが教員のモチベーションを著しく減退させている。
3. 高校「地理」が選択科目であったことに起因する問題
高校では1989年以降「地理」は選択科目となったことから履修率の低下を招き、高校時代にフィールドワークを経験する生徒数が減少した。

高校におけるフィールドワーク不振の要因としては以上のようなことが指摘されているが、2022年より「地理総合」が設置され、地理が必修科目となったことから、これまでのフィールドワーク教育の様々な状況が改善されることが期待される。フィールドワークを学校行事に組み込みやすくなるほか、他の社会科担当教員の理解や協力も得やすくなり、校外に生徒を引率するための手続の問題についても改善が期待される。

しかし、実施環境が改善されたとしても、これまでフィールドワークが不振に陥っていた根本的な原因は、地域教育に携わる教員のモチベーションの低さにあり、「地理教育におけるフィールドワークの重要性や教育的価値が教員に十分に理解されていなければ、実施率の向上は期待できない」との指摘もある。⁸⁾

3. 大学におけるフィールドワーク

上記を踏まえ、大学においては、高校までのフィールドワークの学びを引き継ぎ発展させる役割がある。もしくは入学までにフィールドワーク体験をしてこなかった学生たちにフィールドワークを通じた学びを新たに提供する役割がある。しかし、小中高での不振の原因と同じような課題が大学でも存在するのが現実で、これらの課題を克服しつつ教育方法を検討していくことが求められる。

また、入学前の地域教育と大学での教育では、地域の内部者か外部者かといった点、地域に関わる時間の差といった点を考慮に入れておく必要がある。小中高の生徒は居住地域における地域の内部者であることがほとんどであるが、大学生の場合は、多くの場合は通学という形で地域に関わる外部者の立場となる。地域の活性化を考えた場合、地域の外部者としてのケイパビリティが求められ、この点において大学生に期待が寄せられていることは間違いない。しかし、地域に愛着を持って関与して欲しいといった観点からは、小西・野沢（2013）が指摘するように、場所に対する愛着の形成には時間的要因が大きく影響することを考慮しておく必要がある。通学という形で地域と関わる大学生は、学校周辺の地域で過ごす時間が一般的に小中高生より少なくなると考えられ、「地域に関わる時間が地域愛着に大きな影響を持つ」という点から鑑みると、地域での経験時間が少ない大学生に、いかに場所の経験を積ませていくことができるかが鍵となってくる。既に多くの大学ではフィールドワークを通して地域教育が活発に実践され、地域に関わる時間の確保に大きく貢献しているとみられることから、本稿ではフィールドワークの実践事例を通して考察していく。

Ⅲ フィールドワークの事例報告

大学生が地域貢献に資する外部者になるためには、まずは彼らが当該地域のことをよく知り、その上で地域に愛着を持つことが肝要であると考え。では、地域に愛着をもつためにはどうすればよいのか。人文主義地理学者のイーファー・トゥアンは地域愛着を育むためには「場所の経験」が必要であると指摘している（トゥアン、1993）。そこで、本稿では大学における地域教育の中で「場所の経験」を積ませるためのフィールドワークに着目した。本章では、大学生と共に取り組んだフィールドワークの実践事例を通して、これらの活動が彼らに地域愛着を与えるきっかけになっているのか否かを考察し、今後の大学教育における地域教育のあり方を展望していきたい。

1. 地域愛着と地域概念規定

地域愛着 (Place Attachment) の概念は、地理学などの分野で取り入れられてきたが、イーファー・トゥアンは、地域への愛着を「トポフィリア」と呼び、人が場所に対する情緒的な関係をもつ感情を示す言葉として用いた (トゥアン、1993)。また、環境心理学、社会心理学、都市計画や建築学など様々な分野においても活発に研究がなされ、これからの地域作りにおいて欠かせない人々の地域に関わる活動への動機として、ソーシャルキャピタルの一つとして注目されてきた。

岡野ら (2018) は地域愛着について、「個人と特定の場所との結びつきは機能的、認知的、情緒的、社会的な側面を持つ」 (岡野ら[2018]p.7) と概念規定しているが、本稿では、地域への愛着は人と場所との感情的つながりであると捉え、先行研究 (引地ら、2009、海野、2013) に倣い、地域愛着を「人と地域を結ぶ情緒的な絆」と定義する。

また、地域については、これまでの地域愛着研究では主に対象者が居住する場所もしくは訪問する観光地に対する検討がなされてきたが、本稿では奥田ら (2016) の研究と同様に「学ぶ場」を対象とする。地域の範囲については、海野は「一定の人付き合いを持つ、普段買い物をする場所や職場などを含めた日常生活の活動を行う範囲」 (海野[2013]p.2) と規定したが、本稿では「通学する大学が立地し、その周辺で食事や買い物をしたり寄り道をしたりの活動を通して一定の人付き合いの関係性を構築できる範囲」と規定する。

2. 1 まち探索型学外フィールドワークの事例報告と検討

フィールドワークには様々な形態があるが、まずはまち探索型学外活動に着目して、その有効性を検証したい。

筆者のゼミに所属する3年生と4年生を対象として、2021年7月と2022年7月にまち歩きフィールドワークを実施した。フィールドは本学が立地する堺市内において主要な地域資源が集積する環濠地区および古墳地区とした。これらの地区において、グループ別に地域を探索しながら観光ルート作りを行うという取り組みである。しかし、これらの地区には観光案内などに必ず紹介される主要な観光スポットなどが点在するが、大学生たちはこれらの主な地域資源をあまり認知しておらず、訪問経験も乏しいことが古谷 (2022) の調査で明らかになっている。こうした大学生たちにフィールドワークを通じて「場所の経験」を積みさせることは、地域資源に対する認知度を向上させるためには有効であろうが、果たしてこの経験は彼らの地域愛着を育む要因となり得ているのかが問われるところである。

そこで、まち探索型学外フィールドワークの実施前と実施後で、彼らの地域に対する思いに変化が生じたのかどうかの考察を試みた。フィールドワークを経験することにより地域愛着を育むことができたのかどうか、また、地域愛着の尺度のうちどの項目に変化がみられたのか。それらを解明するための基礎調査として試験的に調べた結果を報告する。

2. 2 調査内容

対象者：3年次ゼミ生 (2021年度14名、2022年度9名)

フィールドワーク実施日：2021年7月3日 (土) 14名 2022年7月2日 (土) 9名

フィールドワーク実施地域：堺市内 (環濠地区・古墳地区)

調査はフィールドワーク実施日前後10日間、調査結果は合計23名で算出しまとめた。

対象者は筆者が受け持つ授業における学外活動に参加した学生であり、対象者の属性に偏りがあることやサンプル数が少ないことなどから、あくまで今後の研究のための問いと方向性を得るための基礎調査としての位置づけであることをあらかじめ述べておきたい。

今回集めたサンプルは、地域愛着に関する先行研究で用いられている愛着の尺度項目について、そう感じたか否かの単純回答形式で得たものである。地域愛着の程度を計るために各尺度における愛着の程度を段階化して得点化しておらず、また、各尺度の信頼性係数を検証したものでない。地域愛着への因果関係を推定するための共分散構造分析をおこなうなどの精緻な分析は今後の課題として残されている。

次に、フィールドワーク後に自由に記述してもらった研修の感想と振り返りのレポートから優位に出現する特徴語を抽出した。自由記述の文中には、フィールドワークでの「場所の経験」が何かしら記述されており、そこから読み取れる特徴語から、学外体験のうちのどのような経験が地域愛着を喚起させるのかの推論を行いたい。テキスト分析にはKH-Corderを用いた。地域愛着の程度を知るための尺度としては、青柳（2017）の報告で使用された項目を参考にして表2の通り15項目を用意した。

表2 地域愛着項目とフィールドワーク体験前後における感情の変化 n=23

	項目	体験前 n	体験後 n	体験前 %	体験後 %
1	このまちを歩くのは気持ちよい	5	11	22%	48%
2	雰囲気や土地柄が気に入っている	4	14	17%	61%
3	このまちの人々に親しみをを感じる	5	12	22%	52%
4	このまちは自分にとって大切な場所だと思う	3	11	13%	48%
5	このまちではリラックスできる	5	14	22%	61%
6	お気に入りの場所がある	4	6	17%	26%
7	自分のまちという感じがする	2	6	9%	26%
8	このまちが好きだ	3	11	13%	48%
9	まちに思い出がある	2	11	9%	48%
10	まちに自分の居場所がある	1	5	4%	22%
11	このまちについてもっと知りたい	5	12	22%	52%
12	このまちがテレビや新聞などに出ていと気になる	4	10	17%	43%
13	このまちに何かあれば応援したい	5	10	22%	43%
14	このまちとのつながりを持ち続けたい	5	9	22%	39%
15	このまちにいつか住みたい（このまちに住み続けたい）	4	6	17%	26%

体験後の結果は、各項目総じて増えたが、半数を超えた項目は、「雰囲気や土地柄が気に入っている」61%、「このまちの人々に親しみをを感じる」52%、「このまちではリラックスできる」61%、「このまちについてもっと知りたい」52%の4項目であった。特に伸び率が高かった項目は、「このまちは自分にとって大切な街だと思う」が57%増、「雰囲気や土地柄が気に入っている」が43%増であった。体験後もあまり伸びなかった項目は、「自分のまちという感じがする」22%増、「このまちに自分の居場所がある」35%増、「このまちにいつか住みたい」26%増であった。

フィールドワークの経験は、地域に対する好意的な感情を喚起させるきっかけになることを示唆する。しかし、外部者である彼らにとっては、いつかは卒業して関りがなくなるかもしれ

ない存在でもあるため、地域への所属意識や居住意思を醸成させることはハードルが高いことも示唆された。

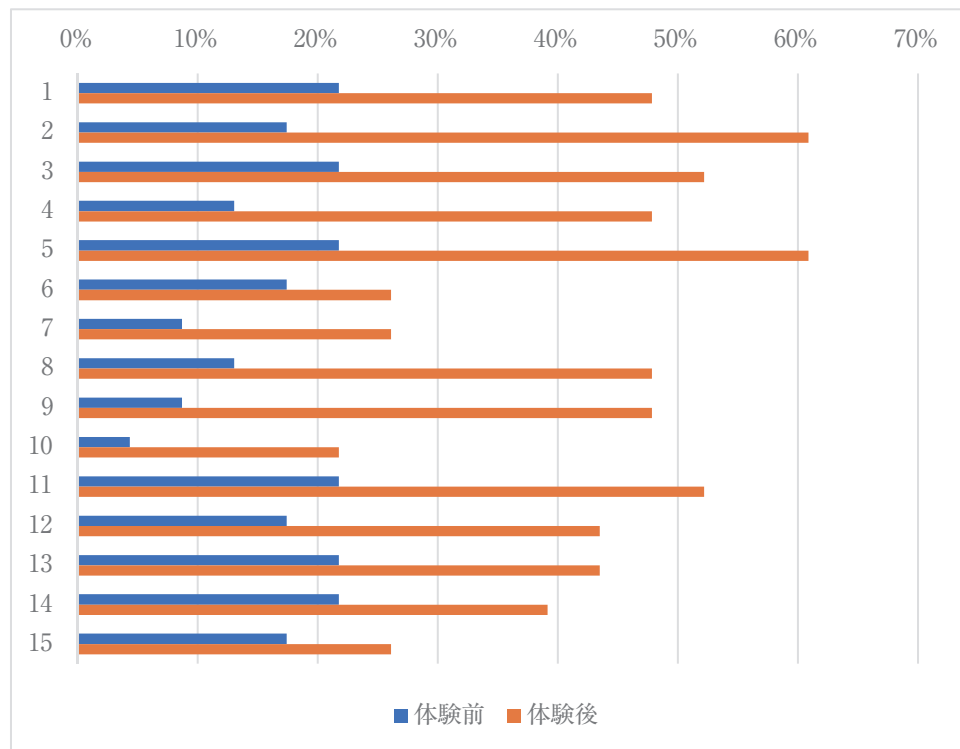


図1 フィールドワーク体験前後における地域愛着感情の変化

ゼミナールの学生たちは地域に関して比較的関心のある学生が多いが、出席に関わるので参加しているといった地域への関心が乏しい学生がいることも否めない。そうした学生も含めてフィールドワークで何を感じたかを捉えるために自由記載から強調語を抽出して考察してみる。

2.4 テキストマイニングによる質的分析

本項では、上記フィールドワーク体験者の経験に質的な分析を加えて考察する。フィールドワーク後の感想の自由記述にテキストマイニングを適用し、そこに現れる特徴語とそのつながりの外観を捉えるためにKH-Corderを用いて共起ネットワークを作成した（図2）。そこから読み取れるキーワードから、どのような地域資源や体験が強く印象付けたのかの推論をおこなう。

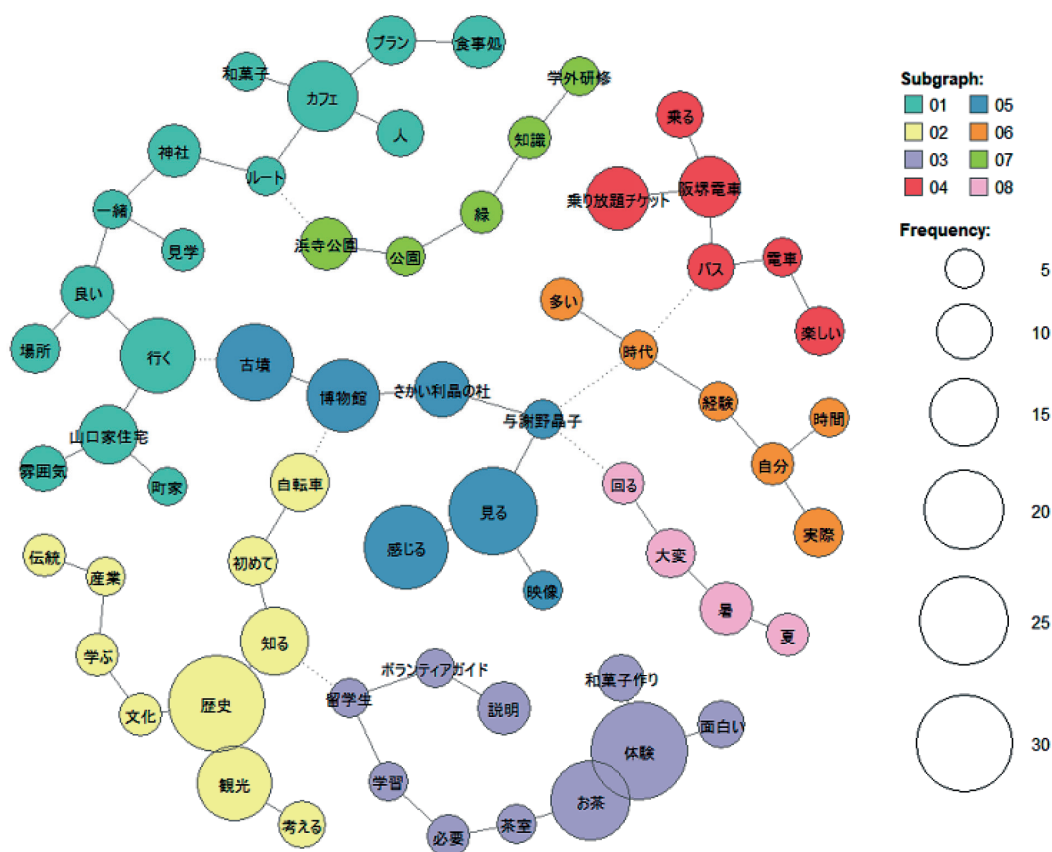


図2 フィールドワーク振り返り自由記述による共起ネットワーク

フィールドワーク後の自由記載から現われた特徴語としては、「歴史」、「体験」、「見る」「感じる」といった3要素が読み取れる。それぞれの特徴語には、「歴史」においては「観光」、「文化」、「学ぶ」、「産業」、「伝統」、「知る」、「初めて」といった言葉が紐付いている。彼らが捉えた地域資源のテーマとして「歴史」が重要な要素であることを示した。一方、「知る」、「初めて」とい表出語は、これまで歴史に関心が無かった、知らなかったということを示し、歴史的資源に関心を向けさせるには事前の基礎知識を与えておくことが必要であることを示唆する。

3.1 体験型地域活動の事例報告と検討

前項での地域体験は自発的な自由意思によるいわゆる観光体験の一つといえるが、半強制的な体験型地域活動ではどのような結果を示すのかを見ていきたい。そこで、部活動における地域の防犯パトロール活動とPBL型プロジェクト演習の事例を取り上げ検討する。

3.2 防犯パトロールの事例

この活動は調査・研究を目的としたフィールドワークではないが、地域貢献活動が地域愛着にどのような影響を与えているかの示唆を得るために取り上げた。本活動は、本学の女子駅伝部員が地元警察署と協働して、ランニングをしながら登校中の小学生に声かけをしながら防犯パトロールするというものである（以降、ランニングパトロールと標記）。

女子駅伝部員9名を対象として、2022年4月（実施前）および同7月（実施後）に聞き取り調査を行い、各項目についての肯定的感情をまとめ表3に示した。

ランニングパトロールは決められたコースを辿るためエリアが限られていること、サンプル数が少ないこと、今回の調査期間が活動前の4月と活動後の7月であり、極めて経験時間の長さが短いことから、あくまで参考として捉えるにとどまるが、何らかの示唆が得られないか検討した。

表3 ランニングパトロール体験前後における地域愛着感情の変化 n=7

	項目	体験前n	体験後n	体験前%	体験後%
1	このまちを歩くのは気持ちよい	4	7	44%	78%
2	雰囲気や土地柄が気に入っている	4	4	44%	44%
3	このまちの人々に親しみをを感じる	3	4	33%	44%
4	このまちは自分にとって大切な場所だと思う	2	3	22%	33%
5	このまちではリラックスできる	5	6	56%	67%
6	お気に入りの場所がある	5	6	56%	67%
7	自分のまちという感じがする	2	1	22%	11%
8	このまちが好きだ	5	7	56%	78%
9	まちに思い出がある	3	5	33%	56%
10	まちに自分の居場所がある	7	7	78%	78%
11	このまちについてもっと知りたい	6	8	67%	89%
12	このまちがテレビや新聞などに出ていると気になる	7	9	78%	100%
13	このまちに何かあれば応援したい	6	7	67%	78%
14	このまちとのつながりを持ち続けたい	7	7	78%	78%
15	このまちにいつか住みたい (このまちに住み続けたい)	1	1	11%	11%

調査結果は表3、図3に示した。体験前は「このまちに自分の居場所がある」、「このまちがテレビや新聞などに出ていると気になる」、「このまちとのつながりを持ち続けたい」が78%、「このまちについてもっと知りたい」と「このまちになにかあれば応援したい」が67%と高い数値を示した一方、「このまちは自分にとって大切な場所だと思う」、「自分まちだという気がする」は22%と低い数値を示した。特に「このまちにいつか住みたい」は11%と最も低い数値であった。

サンプル数が極めて少ないことから、ここから早計に判断することは危険であるが、このように一部においては低い項目があるものの、体験前においても総じて高い数値を示していることは、参加者の地域貢献活動への取組み意識が高いことを伺わせる。

体験後の変化を見ると、「このまちを歩くのは気持ちよい」が75%の伸び率を示し、「このまちに思い出がある」は67%の伸びを示した。この活動は、決められたルート走るという活動であり、自ら能動的に地域を探索するものではない。そのため、地域資源に接する機会はほとんどないが、この活動に参加することで地域の人達との交流とふれあいの機会は生じる。このような交流と触れ合いの機会が、地域貢献活動を通して地域愛着を育むきっかけになればと期待したい。

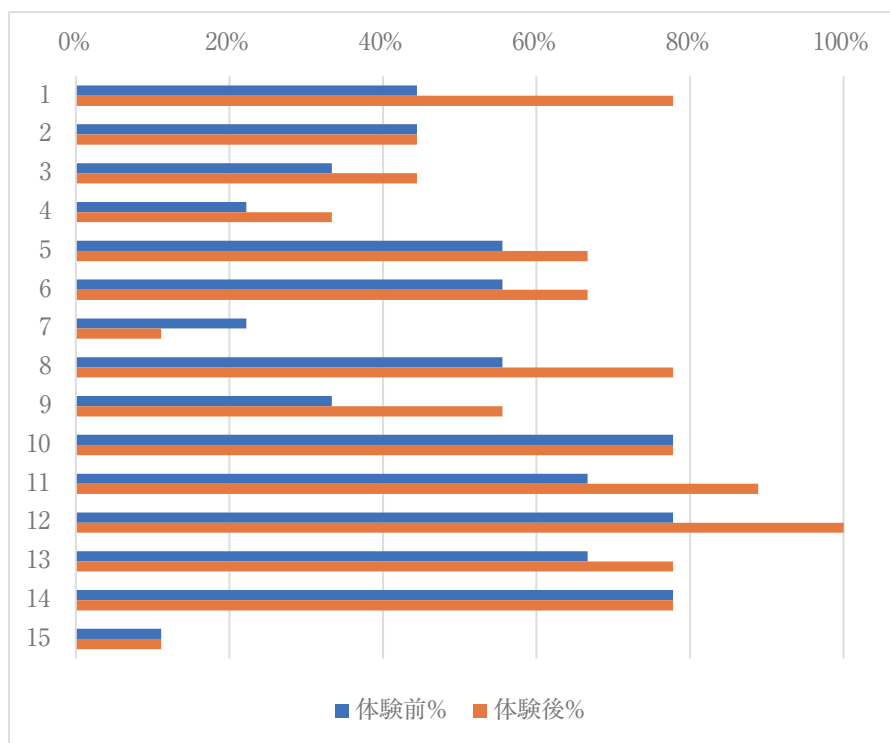


図3 ランニングパトロール経験前後における地域愛着感情の変化

3.3 プロジェクト演習（PBL型授業）の事例

本項では、大学が地域の企業や団体と連携した課題解決型の授業であるプロジェクト演習の事例を取り上げる。プロジェクト演習は、学生たちが地域社会をフィールドに、多様な方々とコミュニケーションをとりながら「現場で学ぶ」姿勢を育み、自ら考え、実践することで、問題発見能力・課題解決能力を培い、また将来、地域社会に貢献することを目的とした正課授業科目であり単位が認定される。

今回取り上げたプロジェクトは、学生たちが自らまちを歩き、取材し、学生ならではの視点で地域を再発見し、地域の魅力をフリーペーパーという形で発信するという活動である。この活動を通して学生たちは様々な体験をした。いままで歩いたことがない場所に足を踏み入れてみる、知らないお店で食べてみる、イベントに参加してみるなどの様々な体験をしたが、特に地域の方々に直接会って話を聞き取材するという体験は、緊張感を伴うが自らのコンフォートゾーンの殻を破り外へ一歩踏み出すためのきっかけとなり、大きな達成感を感じさせるとともに彼らの成長を促したようである。

この経験が、地域愛着を育むきっかけとなり、ひいては地域活動に積極的に関わる人材を育成することに繋がっていけば大学の地域教育の一環として大きな意義があるといえる。

従って、本項でもこの活動に取り組む前と後で地域愛着感情にどのような変化が現われたかを検討する。

調査は2022年度後期に実施した演習科目の履修者13名を対象として、2022年9月（実施前）および2023年7月（実施後）に聞き取り調査を行った。各項目についての肯定的感情の変化をまとめ表4及び図4に示した。

	項目	体験前n	体験後n	体験前%	体験後%
1	このまちを歩くのは気持ちよい	3	7	23%	54%
2	雰囲気や土地柄が気に入っている	2	7	15%	54%
3	このまちの人々に親しみをを感じる	1	6	8%	46%
4	このまちは自分にとって大切な場所だと思う	4	4	31%	31%
5	このまちではリラックスできる	1	7	8%	54%
6	お気に入りの場所がある	1	7	8%	54%
7	自分のまちという感じがする	1	2	8%	15%
8	このまちが好きだ	2	5	15%	38%
9	まちに思い出がある	3	12	23%	92%
10	まちに自分の居場所がある	5	2	38%	15%
11	このまちについてもっと知りたい	7	5	54%	38%
12	このまちがテレビや新聞などに出ていと気になる	8	8	62%	62%
13	このまちに何かあれば応援したい	7	5	54%	38%
14	このまちとのつながりを持ち続けたい	4	6	31%	46%
15	このまちにいつか住みたい（このまちに住み続けたい）	1	1	8%	8%

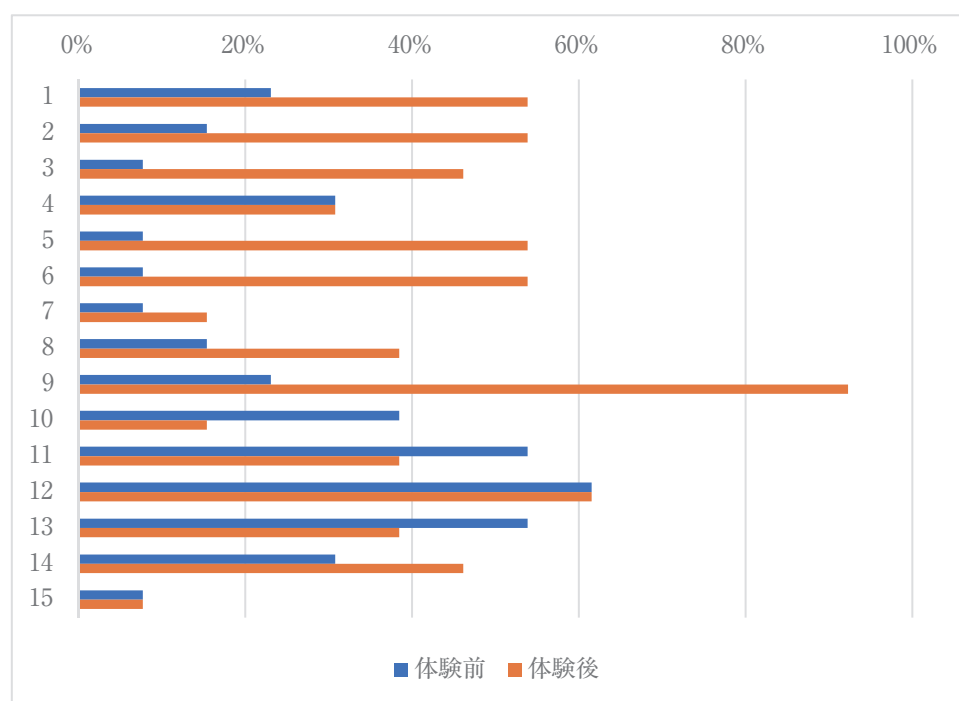


図4 プロジェクト演習（PBL）経験前後における地域愛着感情の変化

プロジェクト演習の受講前と受講後と比較すると「このまちに思い出がある」の項目が突出して大きな伸びを示した。このプロジェクトを通じて学生達は積極的にまちに飛び出して取材活動を行った。その活動の経験自体が大きな思い出となり、ひいては地域に対する思い出として刻まれたことが推察できる。そのほか「このまちを歩くのは気持ちよい」、「雰囲気や土地柄が気に入っている」、「このまちに人々に親しみをを感じる」、「この街ではリラックスできる」、「お

気に入りの場所がある」、「この街が好きだ」、「このまちとのつながりを持ち続けたい」の項目で伸びを示した。この中で「このまちとのつながりを持ち続けたい」は活動の持続可能性に関わる項目である。学生は、卒業後は就職等で他の地域との関わりが新たに生まれることが多いため、継続的に関与し続けることの難しさを含むことを忘れてはいけない。従って、大学生の地域教育では、活動を次の若い学年へと襷を渡し続けることを考慮した取り組みを構築させることが求められる。

また、この演習は単位認定の科目でもあるため、地域をテーマにはしているが地域に対する強い関心があって受講している者ばかりではない。今回の結果では、「このまちについてもっと知りたい」、「このまちに何かあれば応援したい」の項目では数値が低下している。活動を通して地域に親しみは感じるようにはなっても、積極的に関与するまでには至っていないことが読み取れる。地域活動に積極的に関与させるためには、自発的な意志をいかに発動させるかの工夫が求められる。今回の結果を踏まえ、学生の多様な志向に対応しながら、どのような「体験」をプログラムに組み込んでいけばいいのか、どのようにプロジェクトを進行していけば効果的か、どのようなテーマが効果的なのか等を様々な事例を通して検証していく必要がある。

Ⅳおわりに

大学入学前の地域教育においては、フィールドワークの重要性は認知されているものの、フィールドワークのための準備時間の確保の難しさ、生徒を引率するための諸手続の問題、高校「地理」が選択科目であったため履修者が少なくなったことなどに起因する問題で、十分な地域活動が行われていないことが先行研究の整理で明らかになった。

これからの地域を担う人材の育成が求められている現在、初等中等教育を引き継ぐ形で大学に寄せられる期待も大きく、様々な取り組みがされている。今回はフィールドワークを通じた地域教育に着目し、参加者の活動前後の地域愛着の変化を測定することを試みた。測定方法と精緻な分析には多くの課題が残されているが、今後の地域教育のありかたに対する方向性に関して一定の示唆を得ることができたといえる。

本稿ではゼミ活動によるまち探索型フィールドワーク、部活動による地域貢献活動としての防犯パトロール、地域と協働したPBL型授業の3つの事例報告をとして検討した。ゼミ活動は多くの場合ゼミのテーマに関心を示した学生が履修しているが、そうでない学生もいる。PBL型演習は提示したテーマに関心を示した学生が自由意志で履修する科目であるため、他の授業と比べ当初より活動に対する参与意識は高いが、やはりそうでない学生もいる。これは単位認定型の授業に共通した状況でもある。防犯パトロールは部活動の一環としての取り組みのため、本人の意思にかかわらず半強制的に行われる活動であるため、今回は比較的高い数値を示したが精緻な分析をおこなうと低い数値が現われることも十分予測される。しかし、今回報告したいずれの取り組みも何らかの形で一定の地域愛着を育むことに貢献していることが示された。

地域愛着が強い人ほど地域活動への関与に多様な影響力を及ぼすとされている。⁹⁾したがって、今回取り上げたような活動は積極的に継続していくべきであり、可能な限り増やしていくべきだと考える。しかし、地域活動を行うためには非常に多くの労力がかかり、教員の力だけでは限界があることは先に見た初等中等教育時における課題と同様に明らかである。地域教育に携わる教員をサポートし評価する体制が求められる。本学では学術情報・地域連携センター

及び共通教育開発センターが学生の学びと地域社会への貢献活動を融合させる調整的機能を担い様々な取り組みを行っているが、他大学の事例も参考にしていきたい。¹⁰⁾

地域活動は、多様な学生の関心と志向を鑑みると、正規授業や部活動では限界があることも確かである。そのため既存の枠を超えた新たな取り組み手法も検討していく必要がある。今後、大学生による地域活動を推進していくためには、自らの意思で活動をおこなうような学生を育成していく必要がある。正規授業や部活動はそのためのきっかけとして大いに意義があるが、正規授業としてはできない、あらたな挑戦的な取り組みを自分たちでやってみたいという自主的な発動を促すことが求められる。

このような、学生の積極的な関与を促す取り組みは、香川大学において大きな成果を生み出している。ここでのプロジェクトは、「授業・ゼミ」のような単位認定の正課活動と「部活動・サークル活動」などのような正課外活動の中間的位置づけで、「単位認定の対象ではないが、教員が関与する教育活動」としておこなわれている。¹¹⁾ この実践を通して、古川 (2023) は、学生プロジェクトの成功のポイントは次の3点にあると報告している。¹²⁾

- ①学生主体の取り組みであること
- ②自主財源を生み出すシステムをもつこと
- ③得られた知識を伝承するシステムをもつこと

今後の大学における地域教育においては、上記のような様々な事例と知見を活かしながら、地域や大学の実情に合った取り組みが求められる。そして、学生の有効な学びを実現させ、その学びを地域に還元させるためには、学生の自発的な発動に期待するところではあるが、そのきっかけを与えるための地域教育が重要性を帯びる。学生の興味を刺激し学習意欲を高め、広めていくためには教材となるシナリオの工夫が重要であると時本 (2009) が論考しているように、学生たちが活動を通してその成果を実感でき、達成感を感じられるようなシナリオづくりが求められる。

注

- 1) 近年の動向では、文部科学省の中央教育審議会が平成27年にとりまとめた「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」に詳しいが、古くから議論されている課題である。
- 2) 池 (2022)、p.6
- 3) 前掲2)、pp.7-13
- 4) 篠原 (2000)、pp.132-141
- 5) 中山 (2019)、pp.99-101
- 6) 宮本 (2009)、pp.1-13
- 7) 前掲2)、pp.9-10
- 8) 前掲2)、pp.12
- 9) 新里他 (2018)、pp.224-229
- 10) 九州女子大学では、学生が地域活動を通じて学んだ内容を、「地域に根差した実践教育」

として位置づけ、その学びの内容を地域に返す「地の還元」を実践している。そこでは、大学機構が地域と調整を担いながらも、学生が主体となり、テーマを設定し運営するプログラムが実践されている。富山・大島 (2023)、p.374に詳しい

11) 古川 (2023)、p.302

12) 前掲11)、p.303

参考文献

- (1) 青柳涼子 (2017)「地域愛着および地域とのつながりを規定する要因の探索的分析」『淑徳大学大学院研究紀要』第24号、pp.25-42
- (2) 安立清史 (2019)「「地元意識」という謎：大学生の地元意識に関する因子分析」『人間科学共生社会学』9、pp.115-123
- (3) 岩永洋平 (2022)「地域愛着を喚起する観光経験は何か—経験記述のテキスト分析による検討—」『地域活性学研究』vol.16、pp.1-10
- (4) 池俊介編著 (2022)『地理教育フィールドワーク』学文社
- (5) イーファー・トゥアン、山本浩訳 (1993)『空間の経験—身体から都市へ』筑摩書房、(Yi-Fu Tuan, *Space and Place*, University of Minnesota, 1977)
- (6) 海野碧 (2013)「まち歩きが地域愛着に与える影響に関する研究—長崎さるくを対象として—」東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻修士論文、pp.1-6.
- (7) エドワード・レルフ、高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳 (1999)『場所の現象学』筑摩書房、(Edward Relph, *Place and Placelessness*, Pion Limited, 1999.)
- (8) 犬井正「野外調査のあり方と課題」中村和郎・高橋伸夫・谷内達・犬井正編 (2009)『地理教育講座 第Ⅱ巻 地理教育の方法』古今書院、pp.319-330
- (9) 岡野雄気・倉田陽平・藤井岳人 (2018)「観光地への愛着に影響を与える滞在中の経験」『観光研究』Vol.30 No.1、pp.5-18
- (10) 奥田雄一郎・阿部廣二・三井里恵 (2016)「大学生の地域愛着と時間的展望」共愛学園前橋国際大学論集、第16号、pp.157-164
- (11) 北雄介 (2023)『街歩きと都市の様相』京都大学学術出版会
- (12) 小西啓史・野沢久美子 (2013)「大学生の場所愛着に関する一考察」『武蔵野大学人間科学研究年報』2、pp.1-9
- (13) 酒井聡一 (2012)「大学の地域における関心対象に関する研究」『文京学院大学人間学部研究紀要』Vol.13、pp.301-309
- (14) 佐藤郁哉 (1992)『フィールドワーク 書を持って街へ出よう』新曜社
- (15) 下島康史 (2014)『観光ホスピタリティ教育におけるPBLの可能性』くんぷる
- (16) 篠原重則 (2000)「地理教育における野外調査の実態とその再構築への提言」『新地理』47 (3・4)、pp.132-141
- (17) 新里早映・中島正裕・安藤光義 (2018)「農村地域における住民の地域愛着に影響を及ぼす要因分析—山口県長門市俵山地区を事例として—」『農村計画学会誌』37 巻、pp.224-229
- (18) 添田昌志・大山理香・大野隆造 (2007)「大学生のキャンパス周辺地域への愛着に関する研究—その1—アンケート調査および場所への愛着の定義—」『日本建築学会大会学術講演

梗概集 (九州)』、pp.1063-1064

- (19) 添田昌志・大山理香・大野隆造 (2007) 「大学生のキャンパス周辺地域への愛着に関する研究 その2—場所への愛着の形成と地域における行動への影響—」『日本建築学会大会学術講演梗概集 (九州)』、pp.1065-1066
- (20) 鈴木春菜・藤井聡 (2008) 「「地域風土」への移動途上接触が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究」『土木学会論文集D』 Vol.64 No.2、pp.179-189
- (21) 鈴木春菜・藤井聡 (2008) 「「消費行動」が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究」『土木学会論文集D』 Vol.64 No.2、pp.190-200
- (22) 鈴木春菜・藤井聡 (2008) 「地域愛着が地域への協力活動に及ぼす影響に関する研究」『土木計画学会研究』 25 (2)、pp.357-362
- (23) 時本圭子 (2009) 「PBL教育を導入した成果と展望 倉敷中央専門学校の実践」『看護教育』 50 (12)、pp.1082-1086
- (24) 富山禎信・大島まな (2023) 「学生主体の地域貢献活動における教育効果と参加者の評価に関する研究」『地域活性学会第15回研究大会予稿集』 pp.374-375
- (25) 土屋薫・須賀由紀子 (2019) 「地域を支える社会関係資本形成の仕組みの構築—まち歩きによる地域への愛着意識の醸成に向けて—」『江戸川大学紀要』 第29号、pp.305-313
- (26) 中山正則 (2019) 「小学校における身近な地域学習の現状と課題と今後の展望」『新地理』 67 (3)、pp.99-101
- (27) 萩原剛・藤井聡 (2005) 「交通行動が地域愛着に与える影響に関する分析」『土木計画学研5 究 講演集』、25 (2)、pp.357-362
- (28) 引地博之・青木俊明・大淵憲一 (2009) 「地域に対する愛着の形成機構—物理的環境と社会的環境の影響—」『土木学会論文集D』 Vol.65 No.2、pp.101-110
- (29) 古川尚幸 (2023) 「地域と大学が連携した地域作り～香川大学たどつまちLaboを事例として～」『地域活性学会第15回研究大会予稿集』 pp.302-303
- (30) 古谷昌重 (2022) 「羽衣国際大学周辺の観光資源の認知状況分析：本学学生へのアンケート調査を通して」『羽衣国際大学現代社会学部研究紀要』 第10号 pp.93-109
- (31) 堀川強・福本累 (2021) 「大学生による地域愛着形成を促す実践のプロセス」『日本デザイン学会 デザイン学研究』、pp.136-137
- (32) 宮本静子 (2009) 「中学校社会科地理分野の『身近な地域』に関する教員の意識」『新地理』 57 (3)、pp.1-13
- (33) 李永俊・山口恵子 (2019) 「大学における地域思考教育が地域愛着と就職地選択意識に及ぼす影響—弘前市における大学生への質問紙調査より—」『都市社会研究』、pp.61-74